

マルクス「恐慌論」に関するテーゼ I (未定稿)

高田太久吉(2010/10/1)

マルクスの恐慌論

マルクスが生前書き残した文章（公刊された著作、草稿、手紙その他）の中には、恐慌に関係する数多くの記述がみられるが、体系化された恐慌論と呼ぶべき論述は存在しない。マルクス（エンゲルスも）は、恐慌論を体系的に記述する試みを行っていない。

資本制生産様式の諸矛盾の媒介的・複合的現象形態としての恐慌

しかし、マルクスは、恐慌を資本制生産様式に固有の現象と考えており、したがって、この生産様式の内在的諸矛盾の現象形態と考えていた。この内在的矛盾は、もっとも基本的、抽象的矛盾から、媒介的矛盾、さらに恐慌の引き金になる直接的矛盾を含んでいる。恐慌は、これらさまざまな矛盾が相互に媒介しあい、複合的・集中的に顕在化した現象であるという意味で、資本主義の内在的諸矛盾のもっとも表面的な現象形態である。

資本制生産様式の究極の矛盾＝恐慌の究極の「原因」

マルクスによれば、資本制生産様式の究極の矛盾は、具体的使用価値としての商品生産と、剰余価値の生産・実現・取得を目的とする商品生産との間の矛盾である。言い換えると、生活者としての人間にとって具体的に必要な財の生産が、不払い労働＝剰余価値の生産と実現に規定されていることが、恐慌の究極の原因である。

資本の再生産過程の統一的契機が自立・分離することで恐慌の原因に転化する

この究極の矛盾は、上記の媒介的、直接的諸矛盾に媒介されて、最終的には恐慌として発現するが、これらの媒介的・直接的諸矛盾はいずれも、本来資本の再生産（生産と流通の統一）の統一的な契機をなす対立的関係が自立し、分離するということによって媒介される。販売と購買、生産と消費、生産と流通、貨幣の前貸しと回収、部門間の均衡、剰余価値の生産と投資、貸し付けと返済、その他の分離である。

資本の競争と過剰蓄積

これらの諸矛盾が限度を超えて激化し、それらの内的統一を維持することができなくなり、その結果、恐慌の現実的契機に転化するのは、資本の過剰蓄積、したがって、資本の競争によってである。資本の過剰蓄積は、個別資本にとっては競争の激化として現れる。激化した競争のもとで、個別資本はより大きな市場シェアと利潤をもとめて資本蓄積をさらに進め、諸矛盾を制御困難な限界にまで激化させる。

商業資本は再生産の矛盾の発現を繰り延べ、累積させる

こうした内的に統一された二つの契機の分離、自立化、乖離は、いずれも資本制生産様式の究極の矛盾から派生する諸矛盾であるが、これらはまず産業資本から自立した商業資本の役割によって、一定の限度内で解決され、同時により大きな規模で再生産される。商業資本は産業資本から独立し、自立的な運度形態を発展させることによって、商品流通の内部で、矛盾を吸収し、資本の再生産を促進する。商業資本は、産業資本が市場の制限（実現問題）を、一定の範囲で乗り越えることを可能にする。

商業資本の役割は商業信用と銀行信用によって拡張される

商業資本のこの役割は、商業信用によって増幅される。商業信用は、商業資本が、過剰生産、部門間不均衡、貨幣の前貸しと回収などの諸問題を、流通過程の内部で吸収し、一時的にその発現を繰り延べる余地を大きく拡大する。さらに、商業信用自体は、銀行信用に支えられることによって、さらに格段に増幅される。この結果、諸契機の分離は銀行信用の限度によって支えられる限度にまで累積する。こうして流通過程に累積された矛盾は、最終的には商業恐慌および信用恐慌となって発現する。

再生産過程の諸矛盾は個別資本にとって克服すべき障害として現れる

信用に媒介されて累積し、激化する再生産の諸矛盾は、個別資本にとっては、過剰生産（実現の困難）、競争の激化、利潤率の低下として現れる。しかし、個別資本はそれらの問題を資本蓄積の絶対的な制限としてではなく、克服すべき障害として受け止める。

個別資本が採用する手段

個別資本がこれらの障害を克服するために利用する手段は、労働時間の延長、労働強度の引き上げ、賃金の抑制あるいは人減らし、新しい生産技術や安価な材料の導入、価格引き下げ、新市場の開拓、商品の改善・差別化、より大規模な信用への依存、可能であれば、海外進出、生産の縮小（一般には例外的）などである。

再生産の制限を克服する手段はより大きな制限を再生産する

個別資本が資本蓄積の制限を克服しようとして採用するこれらの方法は、いずれも競争をさらに激化させ、資本の過剰蓄積と過剰生産を極度に強める。この過程で、弱小な、あるいは劣化した資本は整理されるが、生き残った資本は、実現問題の深刻化と利潤率の低下にも関わらず、強められた競争のもとで、さらに資本蓄積を進め、生産を拡張し、より大規模に信用を利用する。この結果、再生産過程の諸矛盾は、個別資本にとっても、総資本にとっても、理性的に制御することができない暴力的過程に転化する。

具体的な恐慌の直接的契機・メカニズムは予測できない

こうして、資本の再生産の矛盾が競争激化と信用膨張に媒介されてもはや諸契機の統一性と整合性を維持できない臨界点に達すると、いずれかの直接的矛盾が契機となって再生産の連鎖が中断され、再生産過程が部分的あるいは全面的に破綻し、利潤率の急落、資本蓄積の部分的あるいは全般的停止、言い換えると、恐慌が発生する。その場合、どのような契機が恐慌の直接の引き金になるのか、最初に発生した部分的破綻がどのようなプロセスとメカニズムを介して全般的恐慌に発展するのかは、恐慌ごとにことなる。その意味で、すべての恐慌は歴史的に固有のメカニズムと現象形態をともなって発現する。

利潤率低下と過剰生産の相乗的關係

利潤率の低下と過剰生産（実現問題）の關係は相乗的に作用する。実現問題が利潤率を低下させ、利潤率低下が実現問題を激化させる。これら二つの關係が相乗的に作用することで、恐慌は個別資本にとって制御不可能な、再生産と市場およびそれを支えてきた諸信用の暴力的な収縮という形で発現する。以上の意味で、恐慌は、資本制的生産様式の内在的諸矛盾の複合的・媒介的な現象形態であり、過剰生産と過剰蓄積の一時的な解決形態であり、過剰資本の暴力的な整理過程である。（念のために付言すれば、ここで言う利潤率低下は、資本の過剰蓄積の結果としての利潤率低下であり、マルクスがいわゆる利潤率の傾向的低下として考察した問題ではない）

恐慌は信用恐慌として発現する

恐慌は商業信用を始めとする信用連鎖の破綻、信用の劇的な収縮をともなう。このために、現象的には、恐慌は信用恐慌として、言い換えると、信用の過度の膨張と突然の収縮によって、引き起こされるように見える。しかし、これは恐慌が資本の再生産の諸矛盾の、相互に媒介された、もっとも表面的な発現形態であることによって生じる見せかけであり、信用の膨張と収縮は恐慌の重要ではあるが、直接的な契機の一つにすぎない。

恐慌は商業恐慌として発現する

同様に、恐慌は、消費需要に結びついた小売業ではなく、消費需要から相対的に自立した卸売業の過程で、まず商業恐慌として発現する。卸売業は商業信用に依存する度合いが大きいため、商業恐慌は信用恐慌と不可分の現象として現れ、この信用恐慌は、商業信用の連鎖の破綻として、したがって、商業資本家による手形決済の困難、支払い手段への殺到として現れる。しかし、これらもまた恐慌の原因ではなく現象であって、資本の過剰蓄積と過剰取引の結果である。

資本主義の歴史的発展と恐慌の形態変化

以上が、19世紀前半から最後の四半世紀までの恐慌について、マルクスが書き残した記述を参考にして、一般的に言うことの要約である。

今回の金融恐慌に関連して問題になるのは、今回の恐慌がわれわれが眼にしたような形態で発現したのは、以上のような一般的な恐慌の諸契機の相互関連、およびそれが複合的に形成するメカニズムとがどのように新しい形態をとり、変容した結果であるのかを具体的に解きほぐし、解明することである。